



よりよい教育環境を創るために

学生と教職員による、学生のための
ファカルティ・ディベロップメントの取り組み



2016

鹿児島大学水産学部 FD 委員会

1. はじめに

鹿児島大学水産学部および大学院水産学研究科では改組に伴って、平成 27 年度から新しいカリキュラムが始まりました。大学院（修士課程）では、グローバル化の一環として熱帯水産学国際連携プログラムが創設され、フィリピン大学ビサヤス校、タイ国カセサート大学、インドネシア国サムラトランギ大学、マレーシア国トレンガヌ大学、ベトナム国ニャチャン大学の水産学系研究科と連携して、現在 6 ヶ国 6 研究科で運営がされています。いずれも今年度で 2 年目を迎え、平成 29 年 3 月には、熱帯水産学国際連携プログラムに登録した学生が初めて修了しました。

このような新しい取り組みが順次行われる中、平成 28 年度 FD 委員会では、学生から如何にして忌憚のない意見を吸い上げるか、また、収集した意見の分析結果を速やかに担当教員に伝え、授業改善に役立てるかを課題として活動に取り組んできました。教職員を対象とした研修では、学生の立場に立って改めて就職活動を見直す講演会を開催したり、新カリキュラムについて自由な意見交換を行うワークショップを開催いたしました。この一年間の FD 委員会の活動を振り返り、以下のようにとまとめました。

2. 授業アンケートと授業改善

FD 委員会では受講生に対し、各学期末に授業アンケートを行っています。受講生の抱く満足度を計ることを中心に据えた質問を設定し（表 2.1）、回答の集計結果から各科目の評価を行いました。ここでは、平成 27 年度後期および平成 28 年度前期の授業アンケートについてまとめます。

授業アンケートでは、受講生の満足度に応じ、満足した点あるいは満足できなかった点について具体的な記述ができる様式になっています。各質問項目における科目の平均値を図 2.1～図 2.2 に示します。平成 27 年度後期、平成 28 年度前期ともに科目種（講義・演習、実験・実習、乗船実習）別の満足度（Q2）では、いずれの科目種でも「授業内容に満足した」と答えた割合は 80%を超えており、ほとんどの受講生が学部で開講している科目に満足していることがわかります。一方で、「授業内容に満足した」よりも「授業内容に満足していない」と答えた割合が高い科目もあったことから、これらの科目では授業アンケートの回答をもとに授業改善を行う必要があります。

講義・演習科目と実験・実習科目では、受講の動機を尋ねる質問において平成 27 年度後期、平成 28 年度前期ともに「必修科目だから」、「単位修得のため」と答える割合が高くなっています。Q2 で「授業内容に満足した」と回答した受講生が Q3 の「特に満足した点」については「興味や関心を抱かせる内容だった」を回答する割合が比較的高いものの、他の回答との差はあまり無く、履修の動機が積極的でなくても教員の説明のわかりやすさが授業内容の理解につながり、その結果、受講生の興味や関心を呼び起こして学習意欲をかきたてた、ということが窺え、教員の指導方法の改善に対する効果が現れていたことが示唆されます。乗船実習科目では、必修の有無で履修した動機に違いが現れますが、講義・演習科目などと比べると興味を持って履修・乗船し、満足度も高いことがわかります。

講義・演習科目で「授業内容に満足していない」と答えた受講生の中で、講義への取り組みが積極的であったかどうか (Q4-1) については回答にばらつきがみられました。また、満足できなかった点 (Q4-2) は回答率から「内容がよく理解できなかった」、「興味や関心がわからない」、「教員の説明がわかりにくい」が主です。Q4-2 の記述欄には、パワーポイントのスライド送りが速い、内容が難しすぎる、など授業についていけないことを窺わせる意見もありました。満足できなかったと回答した受講生のうちの約半数は、Q4-1 の「この科目の学習に積極的に取り組んだか」という質問に対し積極的に取り組んだと回答しています。必修科目として履修したが授業内容が理解できず、それでも必修だからと頑張ったが何かを得られたという実感なく不全感だけが残る結果になったと推察できます。分野分属以降の必修科目でこのような受講生をどのようにサポートするかが課題であると思います。

実験・実習科目では平成 28 年度前期で満足できなかったとの回答があり、満足できなかった点にはばらつきがありますが、「教員の説明がわかりにくかった」「教員からのアドバイスやサポートがなかった」と答えた割合が若干高いです。授業内容に満足した点 (Q3) で「教員からのアドバイスやサポートがあった」の回答が多かった授業は、複数の教員、技術職員、TA が指導にあたる演習や実験・実習、ミニッツペーパー、Moodle やメールで学生とやりとりをしている講義、乗船実習などでした。満足度が低い受講生のみならず全体の満足度を上げるには、演習・実験・実習での複数指導、質問をする手段を口頭以外にも設ける、ミニッツペーパーなどで受講生の授業の理解度をモニタリングする、などが有効であると考えられます。

授業アンケートの集計は従来、FD 委員会が行っていましたが、集計作業に時間を要するために担当教員が期末の講義終了後にアンケート結果を速やかに確認し授業改善に役立てることができるかというところとそうでない場合もありました。そこで、平成 28 年度後期からアンケートを紙媒体から Moodle に全面移行し、担当教員がリアルタイムでアンケートの回答結果を把握し、授業改善に役立てられるようにしました。また、アンケートの Moodle への全面移行にともない、満足度を計ることを中心に据えた質問設定から、アンケートの項目と記述回答を増やして受講生から多くの具体的な意見を収集し、授業改善に役立てられるような質問設定に変更しました。授

表 2.1 水産学部授業アンケートの質問項目

Q1. 科目を履修した動機 (複数選択可)	
(答) この授業に興味を持ったので	回答 1
この授業に学習意欲がかき立てられたから	回答 2
履修しやすい曜日や時間帯だったから	回答 3
必修科目だから	回答 4
単位修得のため	回答 5
Q2. 授業内容に満足した はい or いいえ	
「はい」の場合→Q3 へ	
「いいえ」の場合→Q4-1、Q4-2 へ	
Q3. 特に満足した点 (複数選択可)	
(答) この授業は興味や関心を抱かせる内容だった	回答 1
この授業によって学習意欲がかき立てられた	回答 2
授業の内容が理解できた	回答 3
教員の説明がわかりやすかった	回答 4
学習について教員からのアドバイスやサポートがあった	回答 5
その他	回答 6
Q4-1. この科目の学習に積極的に取り組んだか	
(答) 強くそう思う、そう思う、あまりそう思わない、そう思わない	
Q4-2. 満足できなかった点 (複数選択可)	
(答) 授業の内容がよく理解できなかった	回答 1
授業の内容に興味や関心がわかかなかった	回答 2
教員の説明がわかりにくかった	回答 3
学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった	回答 4
その他	回答 5

業アンケートの Moodle での実施については、学生部教務課の特任専門員（Moodle 担当）である榮徳啓介氏に大変ご尽力いただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

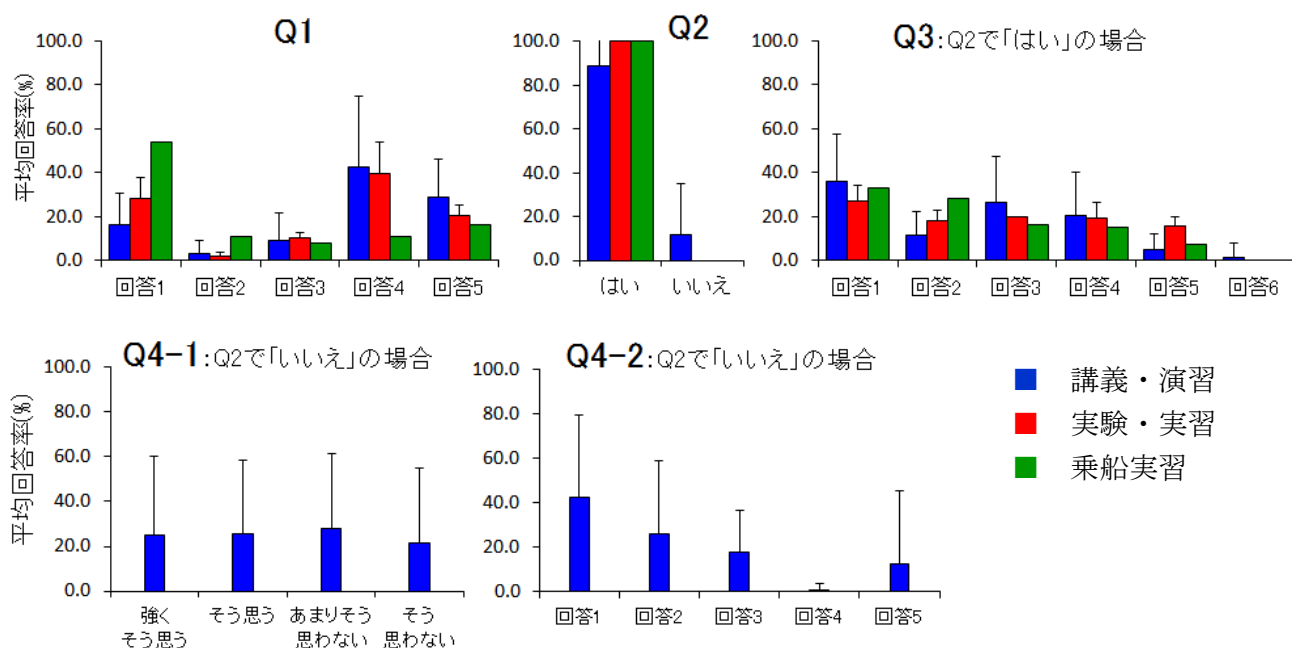


図 2.1 平成 27 年度 後期開講科目の授業アンケートの集計結果

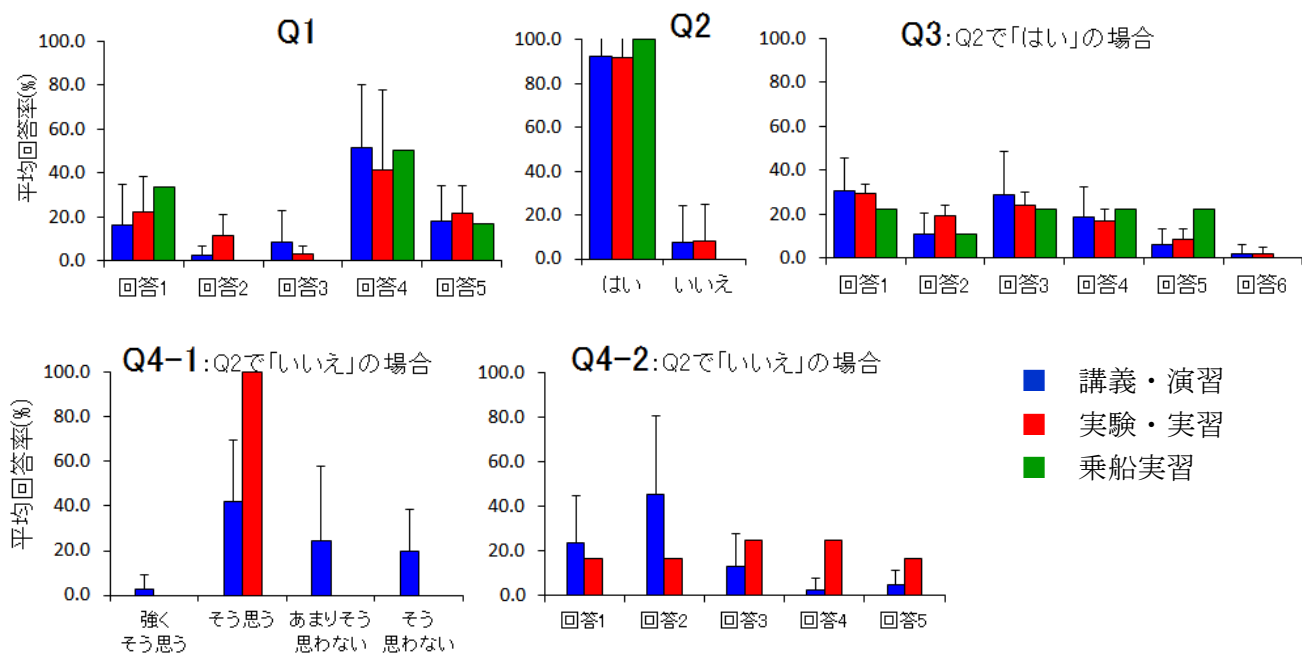


図 2.2 平成 28 年度 前期開講科目の授業アンケートの集計結果

3. 授業公開・参観と授業改善

授業公開については昨年度までと同様に、はじめに全教員を対象としたアンケートを通じて授業公開科目を募り、授業公開科目リストを作成、周知して授業公開を実施しました。平成 28 年度前期、サマーセッション、後期では、下記に示す合計 36 科目で授業公開が行われました。

前期（計 15 科目）

プランクトン学、生物海洋学、養殖経済論、漁具漁法学、資源生産管理学、資源生産管理学
海洋生態学、電子工学基礎、基礎水産資源学、食品衛生学、水産資源生物学、水産生物学
水産生物学、水産物流通論、水産政策論

サマーセッション（計 7 科目）

Management of Tropical Fisheries、Aquatic Sciences、Fisheries Resource Sciences
Aquaculture、高度分析・調査実習 CHE、高度分析・調査実習 BBI、高度分析・調査実習 BCH

後期（計 14 科目）

藻類学、資源利用管理学、資源利用管理学、分子生物学、水産商品需給論、フードビジネス論
水産増養殖学、水産経済学、水産マーケティング論、公衆衛生学、水産科教育法 2
科学英語（漁業工学分野・漁業生産サブ）、実験計測機器基礎、数理資源学演習

授業公開に関するアンケートに関しては、従来の様式では質問項目が複雑で回答するのに時間を要するとの意見があったことから、FD 委員会で検討して質問項目を必要最小限に留め、「参観可能日」と「授業の特徴や参観時のポイント」の 2 項目のみに簡素化して、後期から新しい様式に変更しました。これにより、FD 委員会で作成する授業公開リストの作成も容易になりました。

授業公開に関するアンケートは教員宛メールを通じて複数回実施したり、FD 委員が同じ分野に所属する教員や身近な教員に直接働きかけたことで、授業公開に応じてくれる教員は少なくなく、また、授業参観日はいつでも可能であるとの回答がほとんどを占めました。しかしながら、実際に授業参観が行われたのは前期で 1 科目のみであったことから、サマーセッションでは FD 委員自らが授業参観に参加して改善方法を検討しました。FD 委員会での議論では、「90 分間の授業（実験科目では 180 分間）をすべて参観するのは時間的な負担が大きく、ついつい後回しになってしまう。」などの意見があり、それに対する改善策として「授業の一部のみを参観して、授業参観した教員と科目担当教員の間でのディスカッションに重点をおいた方がより効果的である。」との提案もありました。後期の授業公開では授業参観数を増やすために、「教員数削減の中での大学教育の質の保証と向上」というテーマで平成 29 年 2 月に FD ワークショップを実施することを案内し、各分野で新カリキュラムについての議論が授業参観を通じて活発になるように積極的に働きかけましたが、実際に授業

参観をした教員は4人に留まりました。近年、教員数が削減される中で、ますます教員の業務が多忙になる中で、授業参観数を増やすのは困難なことであり、今後の課題として残されました。

4. FD 講習会「水産学部の就活～その現実と課題」

平成29年1月18日に教職員を対象とした研修会としてFD講演会を開催し、「水産学部の就活と教員の役割」と題して水産経済学分野の佐野雅昭教授にお話をして頂きました。講演では(1)水産学部の就職実態、(2)水産業界が求める人材像、(3)教員が留意すべき事項の3つについて順を追って解説されました。

講演では、まずかかる3つの前提として、大学教育における就職活動の重要性を再認識するために、大学生活が就業による自己実現をはかり、社会人として活躍するための準備期間であり、学生には常に就職を意識した行動や学習が期待されることが強調されました。また、大学教員は就職という教育成果が客観的に示されることを常に意識すべきであるとの指摘がありました。

こうしたことを踏まえた上で、(1)水産学部の就職実態を概観すると、おおむね専門性を活かした就職を実現できている学生像が浮かび上がり、2011～2015年度の業界別就職動向では、食品製造・食品流通産業への就職が43.1%、漁業・養殖業関連が9.1%、環境関連産業が4.9%、水産系公務サービス・団体が6.0%、教員(水産・その他)が3.5%などとなっていることが報告されました。ただし、現状では水産学部生はおおむね専門性を活かした就職が可能となっているものの、直近の動向として、就職活動が短期集中型へとシフトし、幅広いエントリーや、じっくりと企業研究する時間が減っていることから、学生・教員には、早期の準備を整えることが求められることとなります。

(2)水産業界が求める人材像とは、水産学部が卒業生や水産系企業に対して実施したアンケートを分析した結果、複数の専門知識を有した人材であり、そのためには食品業界の動向を理解しており、食品衛生学や水産経営学の知識があることは必須との説明がなされました。それ以外にも、ビジネスパーソンとしての基礎が完成されていることが重要視され、明るさ、活力、誠実さ、積極性、実行力、柔軟性、文章作成能力などがキーワードになっているとのことです。

以上の点を後景として、(3)教員が留意すべき事項としては、学生の就職活動の支障となるような研究室運営および研究活動は控える必要があること、また、大学院への進学者を優先した研究室運営や、就活スケジュールを無視した研究計画の作成、学生の希望を考慮しない卒論指導などは特に問題が大きいことが指摘されました。以上をまとめると本講演会



を通じて、最後の教育機関である大学では、学生の就職を改めて重視した教育体制を構築することが何よりも重要であることが提案されたといえます。

なお、FD 講習会には合計で 58 人の参加者があり、その内訳は教員 45 人、事務職員 7 人、技術職員 6 人で、専任教員の出席率は 83% でした。

5. FD ワークショップ「教員数削減の中での大学教育の質の保証と向上」

平成 29 年 2 月 6 日に教職員を対象とした FD ワークショップを開催し、「教員数削減の中での大学教育の質の保証と向上」のテーマの下、参加した教職員が 6 つのグループに分かれてディスカッションを行いました。まず初めにアイスブレイキングを兼ねて、各参加者が“KATARUTA”（カードゲームの一種）を使いながら現カリキュラムに関する意見を述べ、その後具体的な議論に移りました。議論では、効率的なカリキュラムや講義方法、新カリキュラムの問題点、退職教員の担当科目の引継ぎ方法、オムニバス形式の講義の問題点について集中的に行われ、グループディスカッション後の報告会では各グループより様々な意見が発表されました。多くのグループから、講義に対する教員の負担が増加する中では講義の統廃合が主な解決策と意見が出る一方で、受講人数の増加による講義の質の低下、科目数減少による各分野の人材育成目標の達成が難しくなる、などの問題点も提起されました。また他学部との合同科目の設定や非常勤職員の積極的な採用などの意見も提案される一方、現教員の講義内容の改善や指導力の向上を促すことで科目数を減らさずに対応できるのではないかという意見も出されました。特にグローバル化に伴う英語開講での講義が増加している現状では、教員の技術向上が必要であると考えられます。

新カリキュラムの問題点については、これまでと同様に、カリキュラム変更後に入学した学生が卒業した後に検討するべきだという意見が出る一方、変化に対応するためには速やかに検討に入るべきだという意見も見られました。

退職教員が担当していた科目の引継ぎ



に関しては、教員が退職する前に引継ぎを確実に済ませておくこと、退職教員の非常勤講師としての活用すること、カリキュラム企画委員会が主導になって科目の継続についての検討をすることなどが対処法として挙げられました。またオムニバス形式の講義に関しては、講義内容を各教員間で擦り合わせた上でのシラバスの作成、学生の理解のために各担当教員が共通のテキストを使用するなどの提案がなされました。

最後に越塩学部長から、教育の負担が増加することによる研究力の低下は決して避けなければならないこと、学部における教育・研究の成果が今後の水産学部教員数の増減に繋がり、これが学部教育の質へ直結していることなどがコメントされました。

なお、FDワークショップの参加者は教員 37 人、事務職員 3 人の合計 40 人でした。

6. 大学院授業アンケートの実施

水産学部では、学部で開講される全科目について授業アンケートを行っています。一方で大学院修士課程では平成 25 年度から授業アンケートを実施しており、平成 26 年度には近年の留学生の増加なども考慮して、アンケートの質問項目を日英併記に変更しています。アンケートの様式を図 6.1 に示します。平成 27 年度からは、サマーセッションで来鹿した熱帯水産学国際連携プログラムの学生にも記入を依頼し、講義内容や英語での開講について貴重な意見を得ることができました。また、平成 28 年には Moodle により集計・分析を容易かつリアルタイムにして、担当教員自身でアンケートの結果を確認できるようにしたり、受講人数が少ない科目ではアンケートをなくしたりする等の工夫を行っています。

水産学研究科では英語による授業の割合が高く、英語による必修科目を日本人学生も受講します。「今まで学習してきた内容を改めて英語で学べた。」「専門用語の英単語がある程度わかるようになった。」等の肯定的な評価も多い一方で、「専門用語が多く、用語の解説が欲しかった。」「全てが英語なので、ある程度英語力がないと厳しい。キーポイントは簡単な英語で短く書いてあると理解しやすいと思う。」「テスト内容のアナウンスだけは日本語でしてほしいです。」等のアンケートを行わなければ教員が気づきにくい指摘もありました。また、実用的な英語能力を養成する科目も設定しており、「日常で英語を話す機会があまりないので、その機会を得られたことがまず第一に良かった。また、自分の考えを英語でまとめるというのが身になった。」等の評価を得ています。

水産学部および水産学研究科では改組を行っており、例えば、平成 26 年度以前入学生では 3 分野に分かれていた組織の一部が融合して平成 27 年度入学生以降、新たな分野になりました。平成 30 年度入学生までは、学部卒業時の所属分野より広い範囲で研究科の授業を受講することになります。当該分野の研究方法を学ぶ特別指導の授業では「自分の分野のみならず、他分野の研究について学ぶことができた。他分野の研究は理解できない難しさだったが、勉強しなくてはならない(水産学を学ぶ学生としての)ので、よい機会となった。また、人に伝える技術を得ることができた。自分の研究をいかに専門用語を使わずに伝えるか、修業になった。」という意見がある一方、平成 27 年度

には「基礎知識を一切持っていない分野の話題は授業についていけなかったので、その点のフォローがあればよいかと思います。」という意見もありました。そのような意見を基に平成 28 年度の授業を行った結果、その分野の特別指導では否定的な意見が出なくなりました。

水産学研究科では修士論文研究や指導教員による総合型指導などで研究能力を個別の指導で高めるほか、各種授業でどのように教育効果をあげていくか、さらに検討が必要であると思います。

大学院水産学研究科 授業アンケート (Graduate school of fisheries class questionnaire)

このアンケートは、受講生の皆様とともに授業改善に取り組むための基礎資料として活用します。集計結果のみを授業担当者にお知らせしますので、回答内容が成績に影響することはありません。あなたの考えを率直に記入して下さい。(This survey will be used to improve the class. This survey will never be connected with your grading. Only a summary of the questionnaire will be given to the teacher.)

受講科目名： 学籍番号： 氏名：
(Class name) (Student number) (Name)

所属分野 (該当する□にレ点)： (Please check your field)

【平成 27 年度以降入生】

【平成 26 年度以前入生】

- 水圏科学 (Aquatic Science) 水産生物・海洋学 (Fisheries biology and oceanography)
 水産資源科学 (Fisheries Resource Sciences) 養殖学 (Aquaculture)
 水産食品科学 (Fisheries Food Sciences) 漁業工学 (Fishing technology)
 水産経済学 (Fisheries economics) 水産経済学 (Fisheries economics)
 水産環境保全学 (Aquatic Environment Sciences) 食品資源・利用学 (Biochemistry and
technology of marine food and resources)
 その他 (Others)

上記の質問で、「その他」を選択した場合は所属大学・機関名を記入してください。

(Please type the name of University/Institution which you belong, if you check the "Other" in the above question.)

Q1. この科目を履修して良かったと思う点を自由に記述してください。

(Please describe the good points in this class freely.)

Q2. この科目の改善すべき点について自由に記述してください。

(Please describe the improvable points in this class freely.)

図 6.1 大学院修士課程の授業アンケート様式

7. 卒業時アンケート・修了時アンケート

水産学部では教育 PDM の中で掲げられている学部教育目標及び各分野のカリキュラム目標に対する達成度の調査として、卒業時アンケートを卒業式直前に実施しています。アンケートでは、学部教育目標及び各分野のカリキュラム目標に基づく質問、及び卒業後の進路決定に際して情報収集や相談をどのようにして行ったかを合わせて質問するような設問としました。平成 25 年度から大学院生に対しても修了時アンケートを実施しました(学部回答者数 107 名、修士回答者数 27 名)。ここでは、平成 27 年度の卒業時・修了時アンケートについてまとめます。

卒業時アンケート及び修了時アンケートの設問項目を図 7.1 及び図 7.2 に示します。各質問は「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」「③少し思う」「④全く思わない」の 4 段階で評価してもらいました。項目 A では学部の教育目標に対する満足度を図るために全員共通で 6 つの質問を行い、項目 B では国際化に関する質問(平成 26 年度から追加)を、項目 C は就職・進学に関する質問、項目 D では分野ごとに質問を変えて、満足度を 4 段階で評価してもらいました。アンケートは、項目 A、B、C は全体で、項目 D は分野ごとに集計しました。結果を図 7.3 及び図 7.4 に示します。

項目 A(教育目標)に関する質問では、「少し思う」を加えると、全体として教育目標に掲げた各能力を修得できたと考える学生がほとんどでした。しかし、質問 A-2「地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する知識を修得した」及び A-3「基礎学力が身につく、生涯学べる能力を習得した」に関しては、平成 26 年度調査と比較して、「①十分にそう思う」、「②ある程度そう思う」と回答した学生の割合はほぼ変わらないものの、「①十分にそう思う」の割合が卒業生、修了生とも減少しており、知識の習得に対する学生の自信のなさが示唆されます。平成 27 年度のみ傾向であるのか、次年度以降の結果も踏まえて、今後検討が必要であると思われる。

質問 A-4 の「水産技術者として必要な英語能力が向上した」項目に対しては、昨年度と同様に「少しそう思う」「全く思わない」を選択する学部生が多いが、修了生では「ある程度そう思う」を加えた肯定的な回答数が半数を超えました。しかし、こちらでも「①十分にそう思う」と回答した修了生の割合は減少しており、次年度以降の傾向も踏まえて分析する必要があると考えられます。

国際化に関する項目 B の結果に関しては、卒業生、修了生ともに英語力の向上や異文化理解、国際交流に興味はあるものの(質問 B-13~B-17)、実際には取り組んでいない傾向(B-8~B-11)が見受けられました。また、昨年度と比較して質問 B-8~B-11 で「①十分にそう思う」、「②ある程度そう思う」と回答した学生が減少しており、自発的に参加しようとする学生が減少している傾向が伺えます。今後、国際交流に参加する機会を増やしていくことで、改善が期待できるのではないかと考えられます。

質問 C-18 の就職・進学に関しては、卒業生、修了生ともに傾向が似ており、「十分にそう思う」「ある程度そう思う」が 70%を超えており、希望する職種につくことができた学生が大半であると考えられます。また、今年度は修了生で「十分にそう思う」と回答した割合が半数を超え、就職セミナーなど就職支援に関する取り組みの効果が現れつつあると思われる。

以上から、卒業時・修了時アンケートの結果、学部・大学院の教育目標はおおむね達成できていると考えられます。

平成27年度 卒業時アンケート (学部生用) 学部生はこの面の質問に答えて下さい

1. (設問1) 学部生は①にマークし、下記Aに進む。大学院生は②にマークし、裏面Aに進む

A. 水産学部が掲げる下記の教育目標について、貴方自身が修得できたかどうかを総合的な観点から評価してください。

①～④を選び、別紙のシートに数値をマークしてください。(設問2～7にすべて回答)

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

質問項目 (全員回答)
2. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する知識を修得した
3. 基礎学力が身につく、生涯学べる能力を習得した
4. 水産技術者として必要な英語能力が向上した
5. 情報処理能力が身に付いた
6. 報告書作成、プレゼンテーション能力が身に付いた
7. 現場対応能力が備わった

B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。

評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問8～17にすべて回答)

8. 在学中に海外研修 (Advanced Lecture on Tropical Fisheries など) に参加しましたか?

9. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか?

10. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか?

11. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか?

12. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか?

13. これから、英語の力 (語学力) を伸ばしていこうと思いますか?

14. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか?

15. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか?

16. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか?

17. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか?

C. 就職・進学について、ご回答ください。(全員回答) (設問18に数値をマークしてください)

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

18. 貴方が修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた

D. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。

評価は、下に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。

(設問19～25のうち1つ選択)

①十分にそう思う (当てはまる) ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

専門分野別の質問項目 (1つ回答)
19. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれを取りまく海洋環境の両面から総合的に理解できる必要で実践的な知識・技術が身に付いた
20. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において必要で実践的な知識・技術が身に付いた
21. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
22. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
23. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
24. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
25. 水産教員養成課程 水産教員またはそれに近い分野の教員になるための必要で実践的な知識・技術が身に付いた

ご協力、ありがとうございました。

図 7.1 卒業時アンケートの様式

平成27年度 修了時アンケート (大学院生用) 院生はこの面の質問に答えて下さい

1. (設問1) 学部生は①にマークし、裏面Aに進む。大学院生は②にマークし、下記Aに進む

A. 水産学研究科が掲げる下記の教育目標について、研究科入学時と比較して貴方自身が修得できたかを総合的な観点から評価し、①～④を選び、別紙のシートに数値をマークしてください。(設問2～7にすべて回答)

①十分に思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

質問項目 (全員回答)
2. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する高度な知識を修得した
3. 基礎学力が向上し、生涯学べる能力を修得した
4. 水産技術者として英語論文などの内容を正確に理解し、要約できた
5. 情報活用能力が向上し、自ら学ぶ技術が身に付いた
6. 調査・研究のプロセス全体を進めることができた
7. 就職のメリットとなるビジネス知識等を学んだ

B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。

評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問8～17にすべて回答)

8. 在学中に海外研修 (Advanced Lecture on Tropical Fisheries など) に参加しましたか?

9. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか?

10. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか?

11. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか?

12. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか?

13. これから、英語の力 (語学力) を伸ばしていこうと思いますか?

14. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか?

15. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか?

16. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか?

17. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか?

C. 就職・進学について、ご回答ください。(全員回答) (設問18に数値をマークしてください)

①十分に思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

18. 貴方が修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた

D. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください (設問19～24のうち1つ選択)

①十分に思う (当てはまる) ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

専門分野別の質問項目 (1つ回答)
19. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれを取りまく海洋環境の両面から総合的に理解できる高度で実践的な知識・技術を身に付けた
20. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において高度で実践的な知識・技術を身に付けた
21. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
22. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
23. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
24. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた

ご協力、ありがとうございました。

図 7.2 修了時アンケートの様式

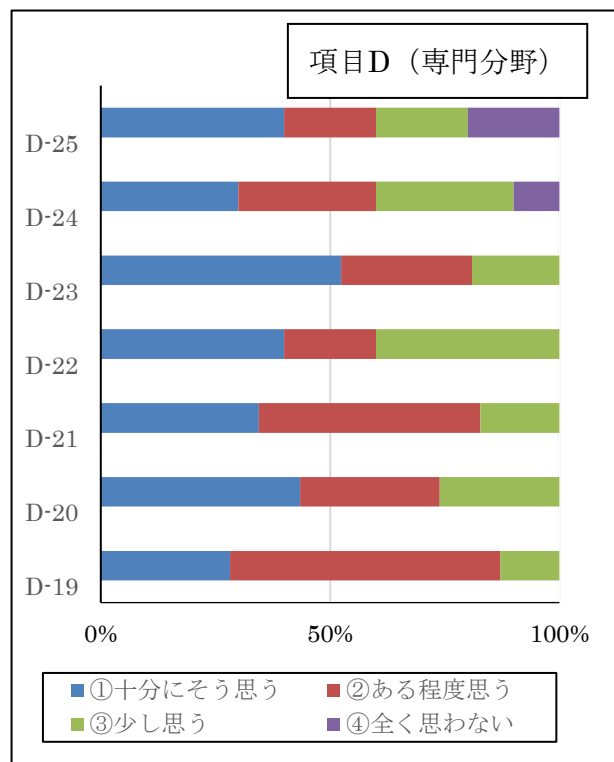
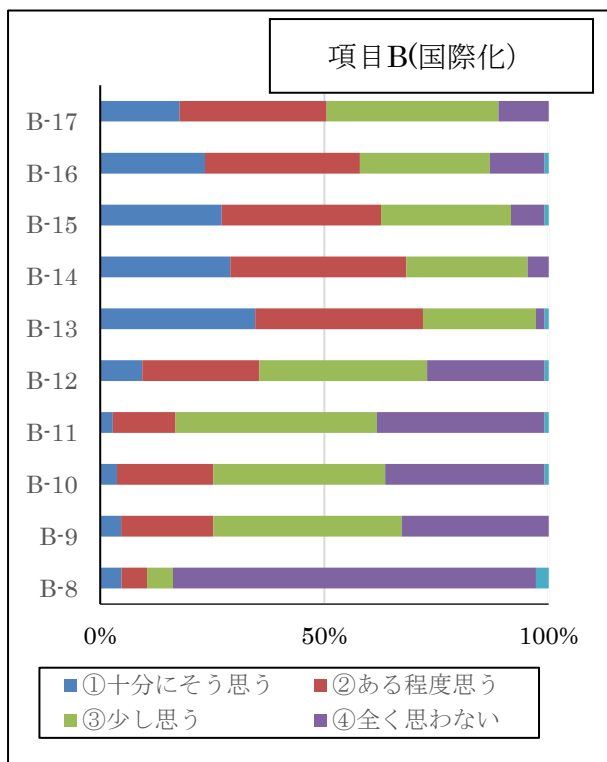
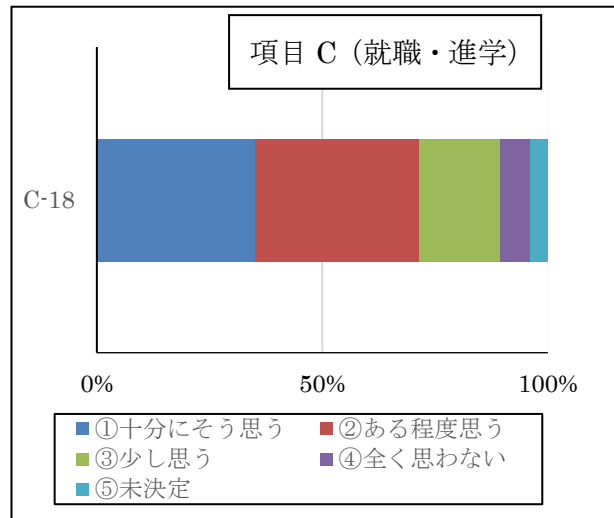
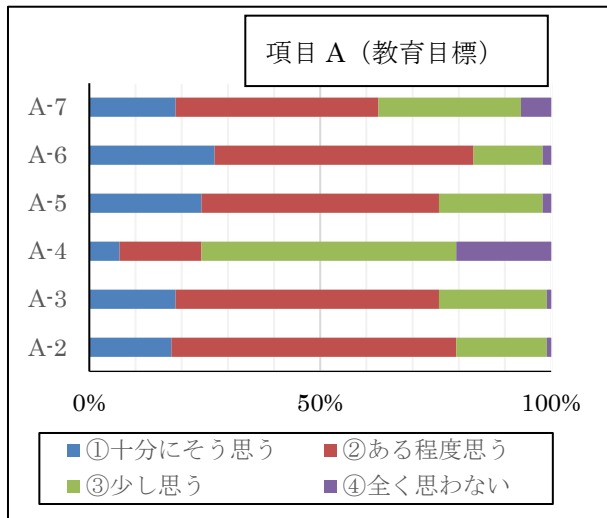


図 7.3 平成 27 年度卒業生に関する集計結果

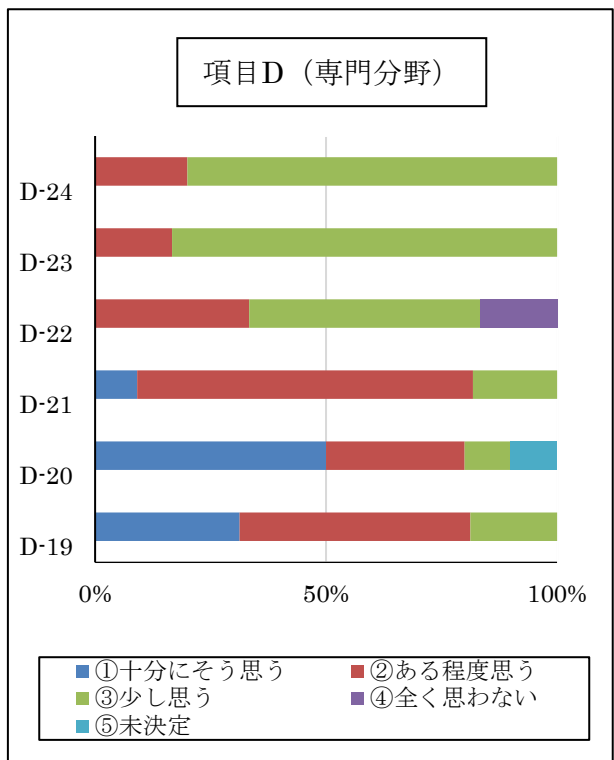
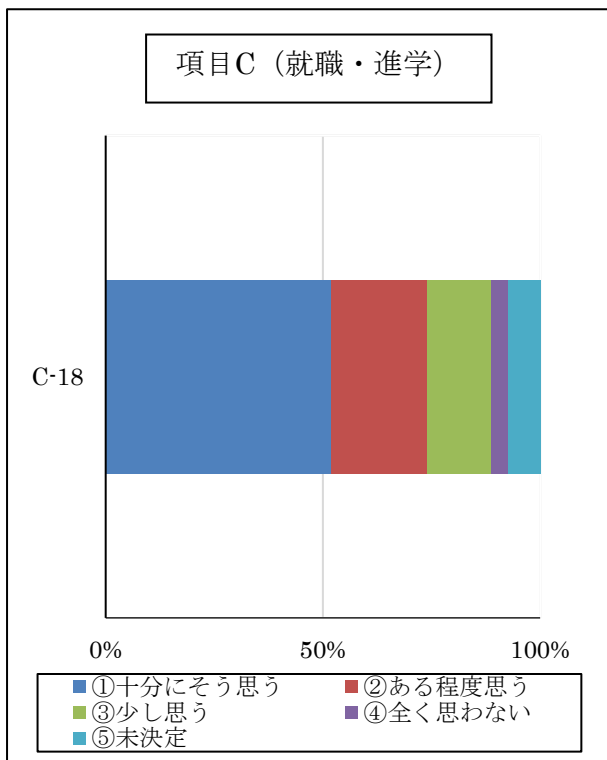
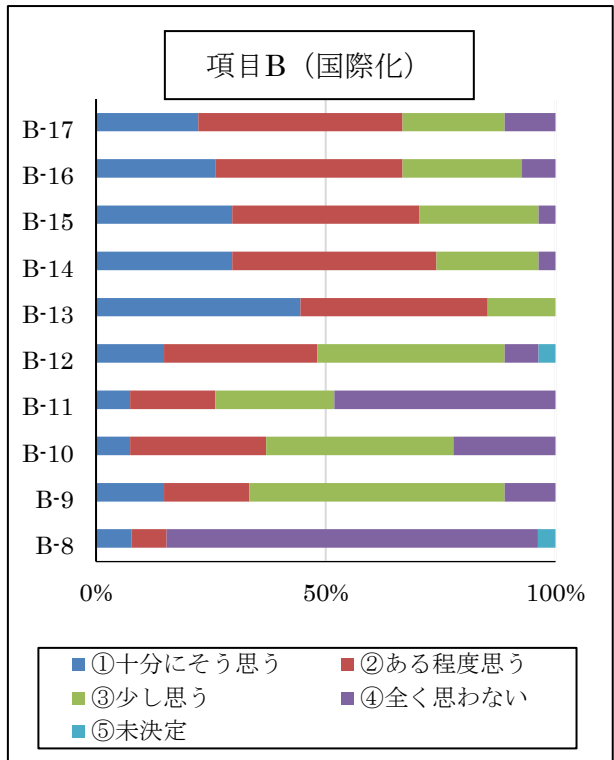
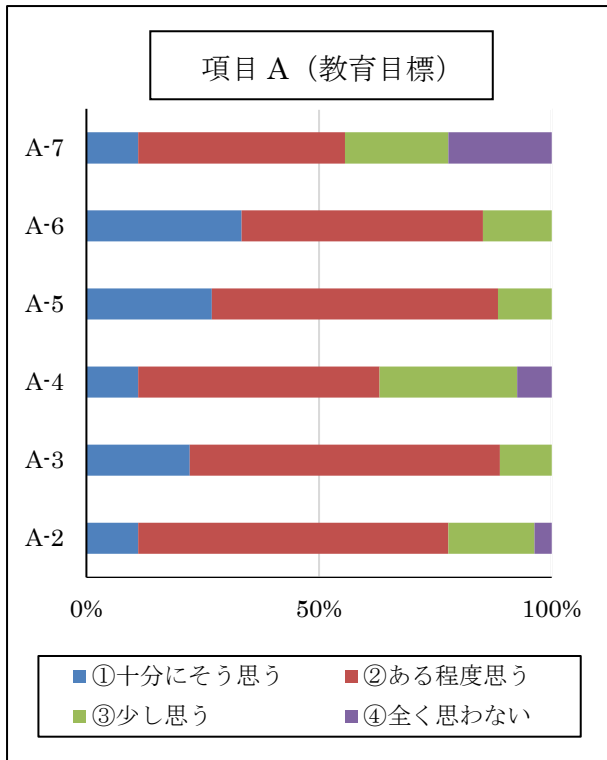


図 7.4 平成 27 年度修了生に関する集計結果

8. おわりに

平成 28 年度 FD 委員会では、委員会の業務を可能な限り簡素化するとともに、授業アンケート、授業公開、FD 講習会、ワークショップなどの結果を教育改善に速やかに、かつ、最大限活かせるような活動を行ってきました。

平成 28 年度後期からは「期末授業アンケート」の質問項目を受講生が回答しやすいように改善し、従来の紙媒体から Moodle に全面移行しました。また、平成 29 年度前期から授業開講期間中に担当教員が授業改善に取り組むことができるように「中間授業アンケート」を新しく導入することを決定し、そのための準備を進めました。

受講生が回答した授業アンケートの結果をもとに、各教員が作成する「授業改善報告書」についても、従来の紙面による提出を廃止し、すべて電子媒体での提出に変更しました。これまで提出された授業改善報告書は FD 委員会で保存されるだけで、あまり有効に活用されることがありませんでした。そこで、平成 28 年度後期からは水産学部ホームページの教職員専用サイトに掲載することにし、教員間で情報を共有して有効に活用できるようにしました。また、年度末に発行している FD 報告書（パンフレット）も印刷物での配布を廃止して、水産学部ホームページに掲載することに変更しました。

これらの取り組みによって FD 委員会の業務がずいぶん軽減されました。同時に、授業アンケート用紙の購入やアンケート集計作業のためのアルバイト雇用料などの経費を大幅に節減することができ、その代わりとしてアンケートデータを保存するパソコンの購入などに予算を有効に使うことができました。

「ネクタイを外して襟元を楽にして、若手からベテランの教員まで、そして事務職員、技術職員を含めた水産学部のすべての教職員でお互いの意見を尊重しつつ自由な雰囲気、学生の立場に立って議論し、新しいアイデアを取り入れながら教育改善を進めていく。」これが FD 活動の原点であると思います。FD 本来の活動が次年度以降もさらに活発化され、機能的に発展していくことが、今後の水産学部、水産学研究科の教育の質の向上に繋がると考えます。



編集：鹿児島大学水産学部 FD 委員会

委員長：江幡恵吾

副委員長：佐久間美明

委員：石川 学、塩崎一弘、仁科文子、佐々木貴文、福田隆二、郡山 茂

鹿児島県鹿児島市下荒田 4-50-20 099-286-4111（代表）